

オープンコースウェアの意義と現状

The significance and current status of OpenCourseWare

学籍番号：201521612

氏名：菊池 隼士

Hayato KIKUCHI

近年、大学には学内で行われている教育活動や生み出された学術情報を社会へ公開し、説明責任を果たすことが求められている。これは必ずしも研究成果としての論文の公開に限った話ではなく、学内で行われている教育活動や、そこで使われている教材の公開も含まれる。このような取り組みはオープンエデュケーションという概念で説明され、その代表的な取り組みとしてオープンコースウェアが存在する。オープンコースウェアの取り組みを推進していくことは、大学による社会貢献や説明責任を果たすことにつながると考えられるが、国内においてはその意義や現状について積極的に議論されているとは言い難い。本研究では、国内における取り組みの現状を明らかにし、今後果たしうる意義・役割についての方向性を示すことで、取り組みの発展への貢献をはかることを目的とした。

手法としては、国内のオープンコースウェアについての文献調査を行い、その定義や意義、課題等を整理した上で、実際の取り組みの現状について Web サイト調査を行った。本研究では、オープンエデュケーションの流れの中で特にオープンコースウェアが果たしうる意義を明確にするため、この流れを汲むもう一つの取り組みである MOOC についても付加的に同様の調査を行った。

調査の結果、オープンコースウェアの取り組みには大学間で統一的な枠組みが見受けられなかったが、誰もが再利用できる形で教材の提供を行うという点に共通の認識が見られた。一方 MOOC については、教材の共有は想定していないものの、取り組みが体系化されており、大学の教育を受ける機会を社会に広く提供するための共通の枠組みと認識があることが推察された。

今後の方向性としては、オープンコースウェアは大学の PR あるいは知の発信・共有の場としての意義を担うことが期待される。MOOC は現状その意義を教育機会の拡大による社会貢献としてとらえることができたが、今後は学習データの利用や反転授業による教育の質の改善・向上に貢献していくことも考えられる。そのためにも、各取り組みの位置づけを明確にし、支援体制を整えることで、取り組みを拡大していくことが求められる。

研究指導教員：逸村 裕

副研究指導教員：歳森 敦